

「生」と「本物」

近年本物志向の風潮のせい、本物でなければダメという贅沢な声をしばしば耳にする。にせものや、まがい物より本物に越したことはないが、本物志向のあまり、いい加減な本物や、本末転倒の事象が目につく。

最近TVでよく見かける言葉に「生中継」とか、「生出演」がある。前者について言えば、どうも実況中継をそう呼んでいるらしいが、どうして単に「中継」だけではだめなのか。「生中継」と「中継」の違いは何だろうか。「生中継」が実況だとすると「中継」はどうか。「中継」が生より古い（前の）録画中継だということになると、実際の「録画中継」の立場？はどうなってしまうのか。後者の「生出演」にしたって、目の前にいる人を前にして「生出演」というのは、表現としてはいささか品がない。これだって「出演」で充分だと思う。どうも生鮮食料品の「できたて」「とれたて」「旬」のイメージに毒されている感じがしてならない。「生」「純生」はビールだけで充分だと思うのだが・・・。

視点は違うが、アメリカのスクールバスは、ほとんどの州で「生」というか、直にものを見るよう教育指導されている。左右の確認は遮蔽物なしにドライバーの「生」の眼で行うことが「マニュアル」によって決められている。ドライバーは、鉄道踏切では必ず一旦停車し、左右を自分の両方の眼でしっかり確認する。ガラス窓越しの確認は遮蔽物を通したものと考えられ確認したうちには入らない。そのためにバスは停車して扉を開け、開いた乗降口を通してドライバーの眼から直に列車の接近を確認するのである。随分手間のかかる確認だと思うのだが、これによってスクールバスの踏切事故は皆無だという。面倒だが、こういう初歩的な安全対策こそが、本当は「生」で実効を上げるということなのだろう。

(近藤)